

むかし。あるお寺にひとりの和尚さんがいました。

ある日のこと、和尚さんは、檀家だんかからの帰り道、野原のやぶの中できつねを見つけました。きつねは、なんだか変なしぐさをしていましたが、すぐに美しい姉あねさまになりました。きつねの姉さまは、道に出てきて、にっこり笑って、

「もしもし和尚さま、どちらへ行ってこられました」といいました。

和尚さんは、

「これは、きつね殿どの。あなたの化けかたは、どうもうまくないなあ」といいました。きつねはびっくりして、

「どうしてわたしがきつねだと分かったんです」とききました。

「あなたは、腰こしからは人間だけど、下のほうはまるできつねだ。それ、しつぽが見える。そら、耳が出た」

和尚さんがいうと、きつねは、

「まあ、ほんとうですか」と、あわてました。和尚さんは、

「なに、じつはおれもきつねなんだ。おれの化けかたはうまいだろう。おれがきつねのように見えるか」といいました。きつねは、

「いえ、きつねのように見えないどころか、りっぱな和尚さまですよ」といって感心しました。和尚さんは笑って、

「あんたは、何を使って化けるんだね」とききました。

「わたしは、この化け手ぬぐいですが、あなたは何を使います」

「おれは、このぼろ頭巾ずきんだ」

和尚さんが頭から頭巾をぬいで見せると、きつねは、

「その頭巾とこの手ぬぐいを取りかえてくれませんか」といいました。

「とんでもない、いやだね」

「そういわないで、取りかえてくださいよ」

「だめだ、だめだ」

きつねは、ますます頭巾を欲ほしがしました。そこで、和尚さんは、いやがるふりをしながら、きつねの化け手ぬぐいと、自分の古びた頭巾を取りかえてやりました。和尚さん

は、きつねの頭に頭巾をかぶせて、

「ああ、りっぱな和尚だ。りっぱだ、りっぱだ」といってほめました。それから、きつねの化け手ぬぐいを頭にかぶって、きれいな姉さまになりました。きつねも、和尚さんに、

「まあ、何てきれいな姉さまでしょう」とほめました。

お寺に帰ると、和尚さまは、化け手ぬぐいを大事にしまっておきました。

ある日のこと、村の若者たちが、お寺にやって来ました。ところが、声をかけても返事がありません。しばらくすると、中から美しい姉さまが出てきたので、若者たちはびつくりして、

「おまえは、どこの姉さまだ。和尚さんはどこ行った」とききました。姉さまは、

「和尚さまは留守だから、ちよつと、鬼ごっこでもして遊びましょう」といいました。

若者たちは、うれしがって、姉さまを追いかけ始めました。姉さまは、ちよろちよろ逃げているうちに、本堂でつかまってしまいました。若者たちが、姉さまに抱きついたらたん、姉さまは和尚さんになって、大笑いしました。

きつねのほうは、和尚さんからもらった頭巾をかぶって町に行きました。すると、町の人たちが、

「ありやりや、きつねがあんな頭巾をかぶってきたぞ」といって、きつねをつかまえようとなりました。きつねは、ほうぼうから追い立てられて、ほうほうのていで、山に逃げ帰ったということです。

おしまい

村上郁再話

資料『老媪夜譚』佐々木喜善／国会図書館デジタルコレクション